創作×ご飯の合同誌

# Companio

[カンパニオ]

2016 秋号

Vol.3

目次

ねむたいときの　笹谷香菜
流星騎士団任命式。　中森つん
アフタヌーンティー　日魚ときお
いつもの店が無くなった時　巫夏希
ストレス解消の手順　豆崎豆太
麻婆豆腐　小早川
東京〜京都　篠田くらげ
三十路リーマンと少女の秋。　ボンゴレーノ麹
炭酸　古井久茂

参加者一覧

# ねむたいときの

笹谷香菜

こいびとの声は昨日へ消えてゆくホットミルクのカップを揺らす
ねむれない夜だ明日もそれなりに笑う予定が入ってるのに
はちみつは透明でいいですね　いま見られたくないことばかりある
いま喉がぜんぶ安心するように嘘はないって言ってよポット
メールには「会いたい」とだけ書いてありホットミルクのせいでねむたい

# 『星影のティーブレイク～流星騎士団任命式～』

中森つん

一杯のお茶をどうぞ。
珈琲にしますか？
紅茶にしますか？
当店ではお客様の様々な症状に合わせたオリジナルブレンドティーを提供しております。
一杯のお茶をどうぞ。
それからゆっくりお話をしましょう。
一杯のお茶があなたの心をあたため終えるまで、わたくしはお付き合いいたします。
さあ、こちらの席へどうぞ。

※

「マイナス二十五点。随分と上達したわね、ニーヤ」
「はい、アリスお嬢様……」
アリス・ティーブレイクが銀のお盆にティーカップを戻すと、受け取ったニーヤ・サウザンドは明らかに肩を落として落ち込んだ。
金色の豊かな髪に、白磁の肌、ラクダを彷彿させる長いまつ毛に、誰からも「可愛い」という答えが返ってくるその容姿。先代の御茶汲み係である彼女の父が太陽系惑星の地球の文学から名付けただけあり、ルイス・キャロルの描いた『不思議の国のアリス』の主人公「アリス」が実在するような幼女が、ギャラクシー船団の貴族の中でも随一の知名度と名誉を大事にしている、ティーブレイク家の当主のアリスだ。そんな幼女に生暖かい眼差しを注がれて落胆するのが、半年前、惑星間違法移民として船団追放を命じられかけた青年、ニーヤ・サウザンド。ところどころにほつれの見られる、薄れた藍色の見慣れない衣服。これはアリスの名前の由来である地球の日本という島国の文化服らしく「書生」と呼ばれる服装だ。青のベルベットのカーテンに赤の絨毯、金色の装飾があちらこちらに装飾をされたこの館において、彼の存在はかなり不似合いだが、当主であるアリスの許可で居住権を得ている。
ギャラクシー船団。それは太陽系からブラックホールを三つほどこえた宇宙に存在する居住船である。一千万もの人口を抱え、都市と自然の調和のとれた船団で「貴族」の階級制度で統率されている。船団長を一等貴族、船団の運航に従事する家系を二級貴族とし、平民が最低級十位に値する。奴隷制度はないが、移民たちは階級を得ることができない。それは不法労働や違法性のある移住の予防の法律となっており、ギャラクシー船団という一個体の尊厳と治安の安定を保つ意味を持つ。はるかな昔、ギャラクシー船団の技術を費やして作られた「蓄光石」は、星の光を宿す人工鉱石として宇宙に名を広めた。現在のギャラクシー船団は、その高い技術力の輸出や整えられた制度を体験するための観光業で支えられている。
ティーブレイク家はその二級貴族に該当する。「御茶汲み係」の名称は、ティーブレイク家でのみ使用を許可された階

級職で、一級階級の団長への接見が自由に認められる。秘伝のオリジナルブレンドは、飲む相手に応じて配合を変え、その時に求められるすべての需要が一杯のお茶に注がれる。ティーブレイク家のオリジナルブレンドを味わうことは、他の貴族の嗜みであり、そこから高等階級への道が開かれるとも言われていた。

※

本日は、流星騎士団の若き隊員、ファリウス・ジーナスの任命式。

流星騎士団はギャラクシー船団に危険を及ぼすものから命をかけて守り抜く、自衛戦隊である。団員数は約三百名ほど。ギャラクシー船団を防衛する形で、一人一機の戦隊機に乗り、ときには、宇宙ゴミの嵐を撃ち落とし、ときには、はぐれ移民のギャラクシー船団乗っ取りへの攻撃から、激しい争いへと巻き込まれる。決して安全とは言えない宇宙の航海において、流星騎士団の活躍により、船団民の安心は得られているのだ。その昔、星屑台風に遭遇してしまったギャラクシー船団は三割近いダメージを負うこととなった。生命維持のための資源のいくつかを手放し、復旧に向けて十年もの歳月をかけた。だが、その三割で抑えられたのは流星騎士団の死者二十七名・行方不明者九名という犠牲を払ったうえでの成果である。

命をかけて船団を守る。それをこの場で誓うのだ。

先日、立て続けに起こったはぐれ移民との交戦による犠牲者への配慮から、任命式は小規模な会場で行われていた。それでも船団長の姿があり、一級貴族が百人も集まる式典は、豪華絢爛なものであった。

「これより、任命式を執り行う！」

船団長の声がマイクのない会場に響き渡る。いくつもの星型の勲章を胸元に光らせる姿に、場内から感嘆の声が漏れる。こうした公式行事でも、船団長の姿を見られることはそうそうない。船団長はいついかなるときも、ギャラクシー船団の安全なる運航と安定した秩序の為に尽くしている。

「ファリウス・ジーナス、前へ！」

百八十センチメートルはある雄々しい仁王立ちをしている船団長の前に歩き出したのは、同じく長身で少し細身の金髪の青年だった。切れ長の碧眼に、参列する女性たちの間にはわずかにうっとりした空気が広がる。船団長と比べると、ライオンとヒョウのような雰囲気の差があるが、彼の凛々しさは伝わってくる。

船団長の前で背筋を正し、すかさず敬礼を行う。動作のひとつひとつに洗練さが見られ、彼が流星騎士団の団員に選ばれた理由は語らずとも納得ができた。

「本日をもって、貴殿を流星騎士団に任命する」

「はい！」

その命をかけてギャラクシー船団を守り抜く意志を込め、指の先までピンと伸ばして敬礼をする。会場内が拍手で埋め尽くされる。これから先の安泰と平穏を願って、人々も心から祝うのだ。

しかしそこに、ファリウスの家族の姿はない。流星騎士団

への入団の際、団員は家族へ宛てた遺書を書く。どれほど危険な任務が待っているのかを物語るものであり、再会を心に決めて戦隊機へ乗り込む。過酷な運命を背負いながらも、船団のすべての民の為に生きると誓う。それがこの任命式だ。

「任命の祝いをこの場で贈らせてもらう。アリス・ティーブレイク、前へ」

「はい」

彼女はそこにいた。船団長が声をかけると、長い金髪を揺らし、スカートの裾をつまんで小さくお辞儀をする。一瞬、会場内は静まったが、ギャラクシー船団の貴族でも、限られた人間しかティーブレイク家のブレンドティーを飲むことは出来ないとあって、すぐさま歓声があがる。アリスは銀色のお盆に白磁のティーカップを乗せており、ファリウスの正面に立つと、そのカップを差し出した。

「おめでとうございます。ファリウス・ジーナス様。船団長より、本日の特別ブレンドの贈り物です」

天使のようなやさしい微笑みをうけ、高揚しそうな気持ちをおさえながら、ファリウスはティーカップを受け取った。

ティーブレイク家のブレンドを飲むのは初めてだった。他の銀河からも、彼女のお茶を飲むためだけにこの船団にやってくる者もいるほどだ。ギャラクシー船団においては、地位と名誉を歓迎されるものであり、まさか自分がたどり着く日が来るとは考えてもいなかった。思わぬ大役に、手が震えてしまう。ゆっくりとカップのふちに唇をつけ、一口を飲み込む。

「……あ……あああっ！」

オリジナルブレンドが喉を通ると、彼はその場に膝をついて泣き出した。会場内が騒がしくなりはじめるなか、船団長は大きなてのひらをファリウスの肩に置くと、やさしい言葉をかけた。

「よく、一族の名誉というプレッシャーと、己の葛藤に負けずに、ここまで励んできた。貴殿はこれから流星騎士団としての栄誉ある任務にあたると同時に、その命をかけなければならない。それがどれほど恐ろしいことか。さぞ、苦しかったであろう。逃げ出したかったであろう」

アリスがブレンドして淹れたのは、ガーネット姉さんの天然水をベースとし、天の川のほとりの菊のエッセンス、銀河を落ちる三分間の粉砂糖だった。

まっさらな気持ちを浮かび上がらせ高貴な気持ちに沿う。使命をまっとうする誇りと、死の危険が表裏一体な任務の最前線にこれから立つファリウス・ジーナス青年の道のりは、どれほど苦難であったか。名誉ある立場になれば、弱さを一切見せてはならない。恐れはすべての過ちに繋がる。アリスのお茶は、彼の中の本当の気持ちである「重圧」と「恐怖」を明確にさせた。

この任命式において涙を見せるなど、一族の恥。これまで築き上げてきたすべての誇りを傷つけられた。こんな小娘の淹れた一杯のお茶なんかに。

ファリウスは持っていたカップをアリスに勢いよく投げつけた。

「お嬢様っ」
がしゃん！
眼鏡とカップがぶつかって、破片が床へと散らばり、任命式に同行していたアリスの弟子、ニーヤの頬にいくつかの傷を作る。アリスの身長と身体能力からすれば、頷くように避けられたのだが、この青年には想像力が欠けているらしい。とっさに身を挺したが、思ったより傷口が深かったようで、自分のてのひらに落ちてくる血液を見て青ざめている。
「情けないわね、貸しなさい」
アリスはつま先立ちをしてニーヤの頭をおさえると、予備に持ってきていたボトルに入っていたガーネット姉さんの天然水を、その頬へぴしゃりと浴びせる。
「いたっ！しみるっ！ひどいっ！」
「黙りなさい」
ごつ！
容赦のないアリスに文句を言うが、もれなく頭突きが返ってきた。額の痛みに気をとられていると、頬のひりひりする傷口がふさがっていく。ニーヤがそれに驚いて彼女へ言葉を発しようとしたときにはすでに、アリスがファリウスに、強烈なかかと落としをくらわしていた。気絶する直前の胸倉を掴まれて、ギャラクシー船団のバッジが飛ぶ。頭を前後に揺らすその力は、アリスの見た目にそぐわぬ怪力である。もう少しすれば、泡でも吹きそうな状態で膝立ちを保つファリウスの顔面に自らの顔を寄せると、逃げることの出来ない緊迫感で迫る。
「ごきげんよう、このすっとこどっこい」
「な、な、なに、を！」
「あなたが家を、一族を背負っているのと同じように、私にはティーブレイク家の役目を背負っているのよ。つらくないなんて嘘を、どうやってつけるのよ」
「そんなもの、どうにだってできる！」
「でもいま、泣いたでしょう？」
「この、小娘が！」
ようやく力をこめられるようになった右腕を振り上げると、目の前のアリスの頬を狙う。瞬間、彼女はふわりと微笑んだ。
「おばかさんね、ジーナスおぼっちゃん」
ごう！
鉛が落ちたような鈍い音の後に、光に透かされた金髪が宙に舞っていた。参列者たちの視線はさまようが、アリスの姿はそこにない。拳を握ったままのファリウスは、その場に残る殺気を感じている。移民であるニーヤの反射神経でそれを追うことは当然できるはずがなく、あたりを見回す。
ただ一人、いつの間にか椅子に座ってほうじ茶をすすりながら、音速で差し出されたお菓子を受け取った船団長が「ああ、ありがとう」と空気に礼を述べていた。
「お待たせしました」
ファリウスの眼前に銀のお盆と黄色い塊が現れた。そこに居るのは紛れもなく、先ほど自分が殴ろうとしたアリスであり、少しだけスカートは揺れて、丁寧にお辞儀をしている。

状況が飲み込めない周囲に対し、ファリウスは懐かしい香りに気がついた。
「これは、母上のスイートポテト……？」
「はい、ただいまジーナス邸に参り、ファリウス様へ召し上がっていただくよう承りました」
「い、いま？」
「はい」
アリスは笑顔を崩さない。ティーブレイク家の人間たるもの、二区域先のジーナス邸へ行き、ファリウスの母であるファミリアの手作りのスイートポテトと一言を預かるのを、三秒で行うことなど当然である。
彼女の言動がまだ理解できずに、だが、鼻腔を刺激する香りに抵抗することはなく、そのひとつをおそるおそる受け取って、頬張った。
「……母上、また、砂糖の量を間違えましたね」
じゃりじゃりとした食感があり、それをお菓子と呼ぶのははばかられる気がした。しかし、幼いころからファリウスの好物を、任命式が行われているこの瞬間に、母が作っていた事実を認めた途端に、頬を一筋の涙が通った。
もう二度と会えなくなるかもしれない息子に、腹を立ててもいいはずだ。いつ死ぬかわからない任務に向かうことを、許さなくてもいいはずだ。それでもファリウスの母は、ジーナス邸のキッチンで、このスイートポテトをひとりで焼いていたのだろう。突然来訪したアリスにそれを託した思いは、ファリウスの胸にきちんと届いているようだった。
「ファリウス、あなたはジーナス家の、いいえ、母の一番の誇りです」
低いトーンだが、穏やかで落ち着いた声色で、アリスはその伝言を告げる。ファリウスは母そっくりの声に目を丸くしながら、今度は涙を流すまいと、必死に口を結んでいた。
「ファミリア様の愛、覚えていらっしゃいますか？」
「当然だ。忘れるはずがないだろう。こんな、砂糖の塊が入ったスイートポテトを、母上以外に作れるものか」
「ファリウス様がその味をお忘れにならない限り、あなたはひとりにはなりません」
「……ああ、そうだ。俺はひとりなんかじゃない」
ファリウスは涙を拭きながら立ち上がると、アリスに向かって深く頭を下げた。
「先ほどの無礼、失礼いたしました」
「いいえ、とんでもない」
「若輩者の気まぐれなど、彼女にはなんでもないさ」
ほうじ茶とともに口にしたスイートポテトの砂糖の塊が効いているらしく、なんとも言えない表情のままで、船団長はアリスのフォローをする。
「いま一度、真実の心をもって、ここに誓います」
しっかりと胸を張り、先ほどまでの言動が嘘のように、彼は強く敬礼をした。静まり返っていた会場内に、再び拍手があふれる。船団長から流星騎士団のバッヂを受け取るファリウスの姿は、戦士のものであった。
「災難だったわね」

船団長とファリウスとともに立っていたはずのアリスの姿は、ニーヤの隣にちょこんと移動していた。あまりにも速すぎるその動きに、ただただ驚いていたニーヤだったが、はっと気が付いて、彼女の目線にまでかがんだ。
「お怪我はありませんか？」
「あるわけないでしょう」
「よかった。その可愛らしいお顔に傷などついていたらどうしようかと、びくびくしましたよ」
「……あなたそれ、真面目に言ってるの？」
「え、な、なにか無礼が！」
「無礼じゃないけど、まあ、いいわよ」
外見は少女にしか見えない、アリスの実年齢が三十二歳という真実を知っているニーヤの一言が、くすぐったい。
「おふくろの味ってやつですね」
ファリウスの凛々しく宣誓する姿を見つめながら、ニーヤは独り言のように呟いた。同じく壇上を見つめてアリスはそっけないため息をつく。
「母親なんていなければ、そんなもの意味がないけどね」
「え？」
「私は脳細胞移植で生まれた『アリス』だから」
有能な才能だけを生かし、残す。ギャラクシー船団の貴族の間では一般的な、脳細胞移植で生まれたアリスにとって、先ほどのファリウスの気持ちなど、微塵も理解できるものではなかった。ティーブレイク家のその技術のすべてを引き継ぐために作られた自分には、親という概念すら持っていないのだ。
ギャラクシー船団に来て半年、その感情をあやふやながら察したニーヤは、あからさまにたじろいでしまう。何をそんなに気を遣う必要があるのか。懐かしい味を持たずとも、ここまでアリスは生きてこられた。そして、自分もいつか、脳の遺伝子の引き継ぎをする。才能の移植手術によって、後継者を残すだろう。
「僕のおふくろの味は、鶏肉の酸っぱ煮です！」
「なによそれ？」
「いつか、アリスお嬢様にも食べてもらいたいです」
「ニーヤ、あなたこの間のホットケーキも生焼きだったじゃない」
「……精進します」
「はいはい、気長に待つわよ」
おふくろの味とやらにどれほどの意味があるのか、アリスにはわからない。ホットケーキも満足に焼けないニーヤが大事にするほどのものであると、認識はできる。母親など卵子の提供者に過ぎない。父親はティーブレイク家の仕事に忙しく、邸内にある肖像画で顔を覚えた。ただ技術を残していくだけの自分の血筋に懐かしさなどあるわけがなかった。
それでも、ニーヤの故郷の味には興味があったし、それによって自分がどのような反応を示すのかも知りたい。おふくろの味がわかる頃、自分には子供がいるのだろうか。そんな疑問をふと浮かべながら、任命式が賑やかに終了していくのを眺めていた。

# アフタヌーンティー

日魚ときお

毎週金曜日にその店に行くのが私の習慣だった。
こじんまりとした品の良いその喫茶店は、ここらでは珍しく本格的なアフタヌーンティーが味わえる店だった。
その日は初めて見る(おそらく新人だろう)ウエイトレスがそろそろとセットを持ってくる。ぎこちないのが逆に可愛い。

ポットからコップに紅茶を注ぎ、まずは一口。そしてケーキスタンドの一番下に手を伸ばす。
ここにあるのはサンドウィッチ。たまごやハムが挟まったその中に、キュウリだけが挟んであるものがある。
大して美味しいものではないが、これが正式なもの。
アフタヌーンティーが盛んだった頃は、キュウリを生のままで食べられるのは農園を所持している上流階級に限られていた。いわばこれは富と権力の象徴。
自分の財力を見せびらかすためだけに存在していたそのサンドウィッチがとても可笑しかった。
かの国の礼儀作法は、相手への気遣いではなくマウントするための道具のように思える。
舞踏会なんて、作法一つで相手の階級がわかってしまうとか、なんとかかんとか。
よっぽど他にすることがなかったのかしら。
少し減った紅茶に砂糖だけ足して、私は二段目に手を伸ばす。

ここにあるのはスコーン。
これは女王様の台座を意味していて、縦に割ってはいけないのだそう。どちらにしろ形状を見れば縦に割ろうなんて気にはならないのだけれど。
真ん中から上下に二等分すると、クロテッドクリームとジャムをたっぷりのせる。スコーンはこのクリームとジャムをのせることによって完成する。単品で食べられるものは、後から食べやすく改良されたものだ。

私がこの店に来る大きな理由の一つが、このクロテッドクリームだった。最近は生クリームで提供するお店も多いけれど、やはりこのクロテッドクリームで食べるのがおいしい。

作る手間がかかり、保存もきかないクロテッドクリームを自家製で出していることを考えると、このセットが少々お高いのも納得がいく。

半分に減った紅茶にたっぷりと牛乳を注いで、私は三段目に手を伸ばす。

ここにあるのはケーキ。一人前にしては多そうに見えるけれど、どれも見かけよりさっぱりとした甘さ控えめのケーキで、ペロリと平らげることができる。

お皿に乗った可愛らしいケーキを見てふと、とあるSNSを思い出した。

話題のお店や有名ドコロのスイーツの写真を頻繁にアップする女のコたちがワンサカいる場所。

あれも、キュウリと同じ。

自分がいかに素敵な日々を過ごしているか、見せびらかすためのもの。

結局人のやることなんて、どんな場所でもいつになっても変わらないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「店長、あの」

「あの方、お得意様だから」

だから失礼のないようにねと戸惑う新人に軽く注意をし、アフタヌーンティーのセットを運ばせた。

毎週金曜、窓際の席。

いつものように食事を終えると、細くて可愛らしい、けれど確かに男性のそのお客様は、いつも通り美しい所作で会計を済ませていった。

コツコツ、ヒールの音が遠ざかる。

国か、時代が違えば。

あの人はああも寂しげに微笑むこともないのだろうかと時折私は考える。

# いつもの店が無くなった時

巫夏希

## 1

「冠天堂が潰れただと……？」

私はその言葉を聞いて先ず抱いた感想は、そんなことなどありえないというものだった。なぜなら、冠天堂は老舗の和菓子屋だ。最近はゆるふわロールケーキなど和洋折衷の食べ物を多くリリースしており、私も週に一度はわざわざ江の島の本店まで食べに行くくらいだったのだが、最近は仕事が立て込んでいてなかなかいくことができなかった。

「違いますよ、夏乃さん。過去形じゃなくて、未来形です。つまり、今月末には閉店してしまうんですよ、冠天堂は」

そんなことは関係ない。

今月末に閉店しようが、いま閉店していようが、そんなことは関係ない。

問題は、冠天堂が閉店してしまうということ。ただそれだけだ。その事実を考えるだけで、仕事に手がつかなくなる。

「……先週もゆるふわロールケーキとロールケーキパフェを食べに行ったじゃないですか。それで我慢してくださいよ」

「我慢もクソもあるか！　少年、二度と食べに行くことが出来ないのだぞ。あの、冠天堂のゆるふわロールケーキを！」

「それなんですけれど……」

電話が鳴ったのはちょうどその時だった。く

そ!!　どうして、このようなときに！　しかも見たことがない電話ということは……。

「……依頼の電話だ」

仕方がない。正直一番電話に出たくないタイミングではあるが、電話に出ないとお金を儲けることができない。そう思って私は電話に出ることとした。

「もしもし、こちら柊木伝承相談所ですが」

『……依頼の電話はこちらで問題ないでしょうか』

声が聞こえた。

か細い男性の声だった。何というか聞いただけで幸が薄そうな感じだったが、それは言わない約束というものだ。内に秘めておく必要があるからな。

はてさて。

仕事の依頼というのだから、少々まじめに話を聞いておく必要があるな。そう思って私は電話に耳を傾けていく。

「はい。そうですが」

『ああ、そうですか。ありがとうございます。すいません、私は新井と申します。実は、我が家には座敷童がいると昔から言われているのですが……、どうも我が家には幸運が訪れないようなのです』

座敷童。

確かに座敷童には家にいるだけで幸運を招くといわれている、定番の妖怪といえるだろう。

だが、その座敷童が幸運を齎さない？　それはいったいどういうことだろうか。

新井と名乗った男の話は続く。

『そして、不審に思った私は、座敷童が住まうといわれる部屋に向かったのです。……我が家にある奥の住まい、それがその部分となります。普

段は当然座敷童が住んでいますから、入ることは殆どありません。けれど、行ってみたら……、そこは血のように真っ赤だったんです。写真も撮影してあります。どうか一度詳しい話を聞いていただけないでしょうか』

それを聞いた私は、疑問を浮かべる形となった。

座敷童が不幸を呼び寄せた、ということか？

それにその地のように真っ赤な部屋。気になる。かなり伝承、あるいは妖怪の可能性がある。もしかしたら除去する必要もあるし、場合によっては新しい妖怪をパッケージングする必要があるかもしれない。

「……解りました。それでは一度、お話をお聞きしましょう。場所はいかがなさいますか？　事務所で話を聞きますが、別の場所でも問題ありませんが」

『そうですか……。実は私の家は江の島にありまして……、できればその近所でお願いしたいのですが』

それなら、と私は思ってある場所を待ち合わせ場所に指定した。

新井は困惑しているようだったが、少ししてそれを了承した。

そうして、新井と私の通話は終了した。

## 2

三日後。

冠天堂フルーツパーラー江の島店に私と少年、そして新井は居た。新井は眼鏡をかけて黒いぼさぼさとした髪、それに赤と青のボーダーのポロシャツを着用した、見るからに根暗な大学生

みたいな風貌だった。おっと、これをいうと根暗な大学生に風評被害だと言われてしまうが、それについては面倒なのでこれ以上言わないことにしておこう。まあ、口には出していないから安心したまえ。

「先ずは……話し合いの場を設けていただいてありがとうございます」

おずおずとしたような口調で新井は言った。

「別に問題はない。私はそういう仕事をしているから話を聞いているだけだ。面白いかどうかは、私が判断する」

「面白い……ですか？」

「ああ。正確に言えば、私がやるに値する仕事かどうかを判断する、ということだけれど」

フリーランスだから、こういうところはメリットになるよね。結局のところ、私としては仕事なんてどうだっていい。別に金に困っているわけではないのだから。だからこそ、私にだって仕事を選ぶことに関しては自由がある。組織に所属していればある程度組織の意思に従わなくてはならないが、個人であればその必要はない、ということ。つまり仕事を選ぶ考え方には、私の面白いと思う心が最優先に選択されることとなる。私が面白いと思えばお金なんて二の次。逆につまらないな、と思ったら幾らお金を積まれても無駄、ということだ。やる気が出ないから、仕事にならない。それが結論だ。

「……解りました。取り敢えず、お話だけさせてください。我が家に纏わる、座敷童の話を」

そうして新井はゆっくりと話を始めた。それが私にとって面白いか面白くないのか、そして、仕事を引き受けるに値するものであるかどうかは、とにかくこの新井の話を聞いてから判断するしかないだろう。

## 3

新井の話を聞き終えるまで、ゆるふわロールケーキを食べることにしよう。それにしても、今日は客が多い。きっと冠天堂の閉店が決まってから俄かのファンが増えてきたのだろう。『テレビでやっているし、有名だから、どうせ閉店するのなら一度食べてみようか』という考えに違いない。はっきり言ってそんな考え下らない。それは意味がないことだし、そこで継続して行きつけの店にするのであればまだ問題ないとはいえ、一度きりで終わりにするのであれば、猶更来てもらいたくない。ファンが増えるのは大変嬉しいことではあるのだけれどね。最近どうも、そういう連中が表れて困っている。

はてさて。

ゆるふわロールケーキはほんとうに美味しいものだ。生クリームに果実をふんだんに入れていて、それをスポンジケーキで巻き込んでいる。さらに外側も生クリームで凹凸を作っているため、見るだけでも面白い形になっている。

因みに。ゆるふわロールケーキを食べるには、フォークではなくスプーンを使用する。それはスポンジケーキが柔らかく、かつ生クリームを大量に使っているため、スプーンを使用したほうが食べるうえで効率が良いためだ。

食べるだけでフルーティーな香りと、生クリームの滑らかな食感、それにスポンジケーキのふんわりとした食感が広がる。まさに『ゆるくてふわふわ』な気持ちになる。それがゆるふわロールケーキだった。和菓子屋一筋ウン十年とやってきた冠天堂が、初めてリリースした和菓子と

洋菓子のコラボレーション。それが、ゆるふわロールケーキだった。

「……あの、話、聞いていますか？」

うん？　まさか私がゆるふわロールケーキを食べていて、話を聞いていないなんてそんなことがあるわけないだろう？　それにその怪訝そうな表情はなんだ。まったくもって不愉快だ。私がそのようなことをするわけがないだろう。まったく、私が大学を卒業したのはつい数年前ではあるといえ、こんな僅か数年で大学生の常識はここまで地に落ちたのか？　……ということは別にいいか。大学生全体に傷つけるような発言をして、イメージを落とすわけにもいかない。これはきっと、彼があまり気づいていないというだけ。ただそれだけなのだろう。そう受け入れるしかない。私はそう思いながら、ゆっくりと頷いた。

「聞いていないとでも思っているんですか。新井さん。あなたの家には座敷童を祭る和室があって、その和室に行くと、血のように真っ赤な和服を着た女性が居た……と。そういうことでしょう？」

聞いていたんですね、とはっきり口にする新井。別にいいけれど、そういうことは気にしたほうがいいぞ。私は別に気にしない人間だから問題ないがな。

そんな新井の人間性に関することはどうだっていい。問題はその『座敷童』について。赤い和服を着た座敷童……か。まあ、話を聞いていた限りだと、一つしか考えつかないのだが。

「……どうですか。一度、調査をお願いできないでしょうか？」

「調査については問題ないでしょう。……ただ、現在の説明を聞いただけでも、あなたの家に何

がいるのかは判明していますが」
「わ、解っているのですか」
コーヒーを啜りながら、ゆっくりと頷く。
「赤い座敷童、という言葉をご存知でしょうか」
私はゆっくりと、その言葉を告げた。
まあ、当然ながらそんな単語は専門知識の持っている人間しか知る由もない。だから、いま目の前にいる新井が首を傾げているのは、はっきり言って『想定の範囲内』だった。
私は話を続ける。
「座敷童というのは、住み着く家に幸福を与えると知られています。それが、普遍的な座敷童のイメージになります。……けれど、座敷童には、人々に不幸を与えるという説話も残されている。それが、赤い座敷童。赤い座敷童は、人々に不幸を与える。そして、その座敷童が家に住み着いているとなると……、その家にも不幸を齎す、ということになるわね」
「……どうすれば、どうすればいいのですか！」
新井は身を乗り出す。
目立つからやめてほしいなあ。そんなことを思いながらゆるふわロールケーキの最後の一口を口に入れる。
名残惜しく思いながらも、気持ちを切り替えて、私は言った。
「はっきり言って、追い出すことは専門外だけれど……、でもやるしかないわね。取り敢えず、今から家に向かうことは出来るかしら？」
その言葉に、新井は大きく頷いた。

## 4

少年は大学の講義があるとのことなので、向

かうのは私だけになった。まあ、別に問題ないだろう。仕事をするのは主に私なのだから。
新井とともに江ノ電に乗り込み、鎌倉駅で下車。そのまま横須賀線に乗り込んで横須賀駅で下車した。
「……何だ。家は横須賀だったのか。であれば、横須賀で話を聞けばよかったな。申し訳ないことをした」
「いえ。別に問題ありません。それに、横須賀はいいところですがゆっくりとお話をする場所、というものが私の中で見つからなかったものですから。江の島でお話しを聞いていただいて問題ありませんよ」
三笠公園の傍にある大きな一軒家、それが新井の家だった。旧家か何かだろうか。それにしても三笠公園には多くの人間がやってきているな。そういえば最近戦艦がブームになっていると聞いたことがあるし、それが影響しているのか？少年も戦艦が出るゲームをプレイしている、と言っていたし。まあ、私はそういうゲームはあまり遊ばないから興味は一欠片も無いわけだが。
家に入り、居間に到着する。それにしても、人の気配が一切ない。この広い部屋に、誰も住んでいないのだろうか。
「……母も父も、不幸が立て続けに起きてから引きこもりがちになりまして……。ですから、それを何とかしたいのです」
ははあ、家族がそういうことになってしまったのか。ならば仕方がない。そう焦る気持ちも分かる。
少し時間を置いて新井はお茶と豆大福を持ってきた。皮から豆が出てきそうだと言わんばかりのごつごつ具合だが、それがまた手作りというか、美味しそうな雰囲気を醸し出している。私

は嫌いじゃないぞ、こういう大福は。
お茶を頂いて、それから大福を一口。うん、粒あんか。やっぱり大福は粒あんに限る。別にこしあんがダメというわけではないが、どちらかといえば粒あんだろう。
大福を食べ終わった段階で、私は一つ頷いた。
「さて、それでは、赤い部屋とやらに連れて行っていただきましょうか」
そういえばネットの都市伝説で赤い部屋というのがあったな。確か、『あなたは好きですか？』というポップアップを閉じると、閉じた人間は死ぬんだったか。まあ、それとこれとは明らかに話は違うと思うが……。
「解りました。それでは、ご案内いたしましょう」
新井はそう言って立ち上がると、部屋を出て行った。私もそれを見て、新井の後を追うのだった。
新井が到着したのは、新井が説明していた離れだった。離れまでは廊下で繋がっているため、靴を履いて移動する必要は無い。
もしかして元々誰かが住んでいたのではないか？　そんなことを思ったが、一先ずそれは一つの可能性として置いておくこととした。
そして、障子の前に到着する。
「……開けるぞ」
「どうぞ」
新井の了承を受け取り、私は障子を一気に開け放った。
そこに広がっていたのは――一面真っ赤に染まった部屋だった。
壁、床、天井は勿論、棚やタンス、テーブルに布団などの家具までもが真っ赤に染まっていた。
まるで、それ以外の色が抜け落ちたかのように。

「こいつは……成程ね」
そして、その部屋の中心には――これまた赤い浴衣を纏った女性がすやすやと眠っていた。
「……どうしたのですか。もしかして、何か見えているんですか」
「見えていない、とは言わせないぞ。部屋の中心に居るだろう。赤い浴衣に身を包んだ、私と同じくらいの女が」
「……まさか、それが座敷童、だと？」
「さあな。いずれにせよ、確認する必要はあるだろう」
そうして、私は部屋の中に入っていく。
どうなるか解らなかったが、あっさりと中に入ることが出来た。
そうして私はその座敷童に声をかけた。
「……名前が解らないから、座敷童と呼ぼうか。お前、いったい何がしたい？」
「……、」
すやすやと寝息を立てている。
根気がいるな……。そんなことを思いながら、身体を揺さぶろうとした、ちょうどその時だった。
「そんなことをしなくても、起きているのよ」
目を閉じたまま、座敷童は答えた。
「……起きているなら、さっさと答えてくれないか。面倒な話になる」
或いは騙されている姿を見たかっただけか。だとすれば随分と子供っぽいが。
座敷童の話は続く。
「私は別に座敷童として住んでいるつもりも無ければ、かつては人間だったよ。ただ、それだけを言っておこうか」
唐突に。
座敷童は衝撃の事実を口にした。

それはつまりどういうことだ？　座敷童は座敷童ではなくて、ただの人間だった……だと？　それは、恐らく、人間が座敷童に、妖怪に変化したということになる。まあ、確かに人間が天狗になるという説話があるくらいだから、人間が座敷童になるケースもあるのかもしれない。

だが、だとすれば。

新井は嘘を吐いている、ということになる。座敷童として住んでいるつもりはない、という言葉から推察するに、長年ここに住んでいるわけではないということになるのだろう。そして、その意味は――どういうことだ？

「それに、彼に私の姿が見えていないと思っているのかもしれないけれど、それは真っ赤な嘘。彼には私の姿が見えているはずだし、声も聞こえているはずだよ。そして、彼は私の存在から逃げている……ということだね。真っ赤な部屋、真っ赤な浴衣、女性の姿を見ようとしない。……さあ、ここから導かれる結論は？」

まさか。

まさか……ね。

「なあ、一つ質問していいか？」

私は背後に立っている新井に問いかけた。

「……何でしょうか？」

一瞬の間をおいて、新井は答える。

「母親と父親は、どこに居るんだ？　この家に、か？」

「そうですね。この家には両親の部屋がありますので、そこにいます」

「ふうん……。もう一ついいかなあ」

「何でしょうか。私に答えられる範囲ならば」

「……この部屋の色、たぶんきっと、私にも君にも持っているあるものを使って人工的に、正確に言えば二次被害になるのかな。とにかく、人の

手で塗られたものだと思うよ。……さて、それは何だろうね？　人間の身体に常に巡っている、酸素や二酸化炭素、エネルギーを運んでいる、その流れとは？」

「……すいません、言われている言葉の意味が理解できないのですが」

笑みを浮かべて、新井は言う。

その笑みはどこか冷ややかなイメージが見える。

「……この部屋の色、すべて血だよ。人間の血だ。人間を殺した時に、その血があまりにも激しく出過ぎたのだろうよ。そしてこれは、お前が父親と母親を殺したときにできた血。そして今私の目の前にいる、不幸を届ける座敷童は……お前の母親だった存在だろう」

「何を言っているのですか？」

途端に、口調に怒気が混じる。

まあ、ここまでは想定の範囲内だ。

さあ、突き詰めていこうじゃないか。この結論に、如何に突き詰めていくか。もう道筋は見えている。

「……この事象を行ったすべての元凶、とどのつまり、父親と母親を殺したのはお前じゃないか？」

「何を言っているんですか。あなたは、あなたは、わざわざ私が雇っておいて、私を蔑むような発言を言いに来たんですか！　帰ってください！　父はもう十年以上前に亡くなっているのに、ここに父の血があるわけないじゃないですか！」

「……ボロを出したな」

ここで終わり。幕引きだ。案外早かったが、それはまあ、詰めが甘かったということにしておこうか。

「別に私はついこないだ父親を殺したとも言っ

ていないぞ？　それにお前はさっき言っていたよな。父親と母親は家に引きこもっている、と。けれど、お前は今十年以上前に死んだ、と言った。矛盾してはいないか？」

それを聞いて、目を丸くする新井。

どうやらこんなところで失敗するとは思っていなかったのだろうな。

「大方、私に赤い座敷童のことを調べさせて、あわよくば消し去ろうとしたのだろう。だが、残念だったな。そこまで私の眼は節穴ではない」

「……なぜ解った」

あっさりと告げる新井。

「お前の母親が教えてくれたよ。殺した後、その罪に向き合わないと、言っていた。ずっと逃げている、と言っていた。まあ、殺人の罪を犯した人間がその罪と向き合っていれば、とっくに自首するなりなんなりでその罪を償っているだろうがね」

それを聞いた新井は膝から崩れ落ちた。

もうこれ以上私の出る幕は無いだろう。そう思って、私はそのまま部屋を後にした。

新井はずっと泣いていた。その涙が誰のための涙であるかは――言うまでもないだろう。

## 5

「……そんなことがあったんですね」

次の日。私は少年からあの出来事の顛末を教えてほしいといわれたので、説明した。そうして終わったあとのコメントがそのコメントだった。

「まあ、ハッピーエンドとは言えないが、少なくともバッドでも無いだろう。彼はあのあと自首したそうだよ。母親を殺した罪を償う、とね」

テレビのワイドショーではその話題で持ち切りになっていた。当然だろうな、母親を殺したという事件だ。ワイドショーで盛り上がるにはうってつけの話題かもしれない。被害者からすればたまったものではないが。

少年は私の机に紅茶の入ったティーカップを置く。

「ああ、ありがとう。……そうか、そういえば、冠天堂は潰れたんだったな……」

やはり、あのゆるふわロールケーキを食べないとどこか落ち着かない。昨日食べに行ったとはいえ、恐らくもう食べに行くことは出来ないだろう。ミーハーな人間が日を経るごとに増えていくだろうからな。

「夏乃さん、その話なんですけど」

少年がそう言って冷蔵庫を開ける。

なんとそこには冠天堂のロゴが入った箱が入っていた。冷蔵庫からそれを取り出して、私の机の上に置く。そして箱を開けると、そこに入っていたのはゆるふわロールケーキだった。

「これは……？」

「冠天堂は閉店します。けれど、それは、フルーツパーラーだけなんですよ。菓子の販売自体は店舗と通信販売で続けていくそうなんです、って……この前伝えようとしたんですけれどね。電話が入ったので途中で切っちゃったんですけれど」

それを早く言え。私がどれだけ冠天堂ロスに苦しんだと思っているのか。少年はきっと解らないだろう。いや、恐らく誰にも解らないかもしれない。そんなことを思いながら、私は今日も冠天堂のゆるふわロールケーキに有り付くことが出来るのだった。

終わり

# ストレス解消の手順

豆崎豆太

無くて七癖という言葉の多分に漏れず、俺の恋人にも癖がある。

「ただい」

ま、まで言えなかったのは、玄関入ってすぐのダイニングに大量の料理が並んでいたせいだった。無論、来客の予定があるわけではない。

パエリアを中心にタコのサラダ、トマトスープ、スペイン風オムレツ。

ああこれは何か嫌なことでもあったんだなと思ってから、まだ何か作っている恋人に目をやる。

恋人は、嫌なことがあると料理をし始める。「嫌なこと」のレベルに比例して手の込んだものを、それも大量に作り始めるのだ。

いつだったかチョコレートケーキとクレープシュゼットがここに並んでいたときは背筋が冷えたものだったが、今回はパエリアにサラダにスープにオムレツだから、理不尽な目に遭って怒っているというよりは仕事でミスでもしたのだろう。

「ただいま」
「ん、あれおかえり。いつ入ってきたの？」
「今さっき。それ何、クリーム？」
「これは今からクレマカタラーナになります」
「なにそれ」
「スペイン風クリームブリュレ」
なるほど、どうやら今回のテーマはスペイン料理らしい。
彼女は料理を作ることと食べることがストレス解消の手順になっているようで、だからこういうときに生み出される料理は毎回ちゃんとおいしい。冷蔵庫で冷やしてあったワイン（スペインで統一されているあたり念が入っている）のキャップシールをナイフで切り、コルクを抜く。彼女は作業していたココットをふたつ、冷蔵庫に入れてからダイニングテーブルに座る。
「最近、作る量が増えてない？」
「それはごめん。食べてくれる人がいると思うとつい」
「まあ、おいしいからいいんだけど」

言いながらワイングラスにワインを注ぐ。自分の分と、恋人の分。ボトルを置いてグラスを持ち、高く掲げて乾杯する。

彼女はよく食べる。

あの細い体のどこにその量が収まるのかというほど、よく食べる。

タコのサラダは少し酸っぱくて、にんにくとバジル、それからオリーブの香りがする。トマトのスープ、確かガスパチョというんだったか、これもさっぱりしておいしい。きゅうりとピーマンの青臭さが涼しくて良い。

スペイン風オムレツは人参、じゃがいも、玉ねぎが入っていて優しい味がする。調味料はあくまで控えめで、野菜の甘味が感じられる味付け。

パエリアは魚介のだしがよく出ていて、これもやはりおいしい。パプリカの甘み、レモンの酸っぱさがアクセントになっている。ただし腹にたまるのでペースを間違えると他の料理が食べられなくなるのがネックだ。

胃が悲鳴を上げてなお食べたくなってしまい、かつそれに応じて食べてしまうせいか、最近腹が出てきた気がする。幸せ太りだと同僚に茶化されたが、まあ、事実なの

で仕方ない。
「おいしい。全部おいしい」
「感想が雑」
「感想を言う時間を省いてでも食べたいんだ」
「じゃあ許す」
多分あまりいい日ではなかったのだろう彼女は、今はもう笑顔に戻っている。
してやれることは何も無いのかと思っていた時期もあったが、それは違うと少し前にわかった。俺に料理を食べさせることもまた、彼女のストレス解消の手順に組み込まれているのだ。
いっそ行儀が悪いほど口いっぱいに料理を詰め込んだ彼女と目が合う。俺もまた口いっぱいに料理を詰め込んでしまっていて、何か言えるわけではない。彼女が笑う。俺も笑う。取り敢えず今はこれでいいのだと、思う。
テーブルの上に乗っていないもの、例のデザート、の分まで考えずに食べてしまい、後悔したのは翌日だった。

# 麻婆豆腐

最近こういうものが無性に食べたくなるのは口寂しいのか、はたまた日常に刺激が足りないのを埋めようとしているのか。仕事には慣れきっていてどんな問題が起きても即座に三手ほど対策は浮かぶし滅多に動じることもない。それは有能というよりも長く同じ仕事を続けている進歩のなさから来た慣れだ。間違いない。

「お待たせいたしましたー」

ああでも、昨日久々に連絡したあの子はやっぱりよかったな。あなたのことなんか好きじゃない、他の女と仲良くすればいい、そしたらどんどんどうでもよくなれるからとか言ってた。なんだろうなアレ。好きだと言ってるようにしか聞こえないよ。そういえば久しぶりって言ったら即座に三ヶ月ぶりだねって返ってきたし、もしかして数えてたんじゃないだろうか。なあ。

さあ、午後も仕事だ。振り向いてもらえる男であるよう努力をしよう。そしていつか、二人で辛いって言い合いながらこういうのを食べるんだ。

小早川（@dodoitsu）

# 東京〜京都

篠田くらげ

「じゃあ、あとよろしくな」
杉谷はネクタイを直しながら言った。
「おう、任しとかはったらよろし」
「あやしい関西弁を使うな」
関東人やろ、関東弁しゃべっとき。杉谷はぶつぶつ言う。
京都駅。俺と杉谷がはじめて出会った場所だ。急に京都支社に転勤になってわけもわからず異郷に来た俺を駅まで迎えにきたのが杉谷だ。京都タワーがやけに大きく見えて……。
「一ノ瀬、聞いてんのか？」
「あ、ああ、悪い。ちょっと気をとられて」
「ったく何しとんねん。ええか、仲屋さんには世話になってんねんから、お中元もお歳暮も

忘れたらあかんで。それからな、昨日話した件やけどな、メールで催促し。忘れはんで。あと坂本さん来はったらな」

「わかってるって。心配性やなあ」

「お前がちゃんとしてへんからや、あんなあ、京都で不義理するっちゅうのは……」

杉谷は職場の先輩だった。中途採用で勝手のわからない(なのに京都に行かされるとは！)俺に、杉谷は何かと世話を焼いてくれた。先輩とはいえ俺たちは同い年だったから、意気投合するのも早かった。仕事の質問もしやすくて、俺は杉谷を頼るようになった。俺も徐々に仕事を覚え、いつの間にか関西弁も身についてきた（はずだ）。

その頃からだろう、俺が杉谷に惹かれるようになっていったのは。しかしそれもどうしようもない。俺たちは……男同士だ。

ある日、杉谷が俺をお好み焼き屋に誘った。

「一ノ瀬、今日あがったら暇か？お好み焼き行くで」

「お好み焼きくらい。関東でも食べられますで」
「あやしい関西弁を使うな」
杉谷はそこで一度言葉を切る。さすが関西人、言葉へのこだわりは強い。
「関西のお好み焼きを関東のと一緒にしたらあかん。あれはな、別の食いもんや」
「ほんまですの」
……そういうことになった。

杉谷は器用な手つきでお好み焼きを焼いてくれた。
「さ、食べ。冷めんで」
「い、いただきます」
目の前のお好み焼きはたしかに美味しそうだった。食べる。……うまい。
「これは確かに……別もんや」
「せやろ。これが関西の味やな」

杉谷もお好み焼きを頬張る。その唇がやけに色っぽく見えて俺は慌ててお好み焼きに目を移す。杉谷の自慢(?)はともかく、確かにお好み焼きは関東のそれとは別物だった。

それから。しばらくして。杉谷の東京異動が決まったのだった。辞令を見たとき、俺は真っ青に……なってはいなかったと思うが、その日の仕事が手につかなかったことは確かだ。お前何しとんねん、おかしいやないか、と散々杉谷に叱られたのを覚えている。でも仕方ない。仕事は仕事だ。そして俺たちは……男同士だ。

「じゃ、行くからな」
「ああ。気いつけてや」
そのとき。杉谷の唇が閃いて。俺の首筋を稲妻のように捉えた。
「お前も戻りいや、東京。まっずいお好み焼き食いに行くで」
杉谷が俺の首もとで囁く。

「な、なあ？なあああああーーーーー！？」

じゃな。軽く手を振って杉谷は新幹線に乗り込み、のぞみ六十三号は京都を出発した。わけもわからずホームに立ち尽くす俺を残して。

これがホンマもんやな（杉谷）

# 三十路リーマンと少女の秋。

ボンゴレーノ麹

じゃあよろしくお願いします、と頭を下げられるのはいつものこと。すっかり日常に溶け込んでしまった少女は、自分の母親に手を振っている。今日も今日とて部下の尻ぬぐいのために夕食の時間を過ぎてから夫婦揃って飛び回るはめになったのには同情を禁じ得ないが、それよりも、ちらりと見下ろした少女の手のひらの小ささが少し寂しい。

「あー、今日、なんかする予定だったの？」

「おつきみ」

「……そう」

ぽつん、と呟いた少女の手に持たれていたのは小さなバスケット。狭い居間（といっても、この家はワンルームなので居間も寝室も同じだ）に少女を座らせて開いたバスケットには、ピンクの布に包まれた団子がいくつも転がっていた。

生憎ここにはすすきの一本も無く、また今日は雨模様。夕方からしとしとと降り始めた秋雨は、猫の額程度のベランダを既にまんべんなく濡らしている。

こういう時、どうするのが正解なんだろう。子供が居ない、結婚もしていない自分に、後輩夫婦の家庭に口を出す権利があるのだろうかとも思うし、それに加えたってこの子の扱いは無いんじゃないかとも思う。まだ両親に甘えたい盛りの少女が、こんなにも耐える必要があるのだろうか？ その疑問は、未だ言葉にできずに、今日もバスタブに沈んでいくことだろう。

「お団子、食べる？」

「ん！」

少女はこちらの声かけにぱっと顔を上げて笑った。その笑顔が作り物ではないだろうと信じたいが、どうにも弱気になってしまう。大人は時に弱い。

持参した真っ白い団子をどの皿に盛りつけるかと悩んで、結局は薄いブルーが入ったガラス皿にした。夏は過ぎてしまったけれど、男の一人暮らしなんかこんなものだ。むしろガラス皿があったことを褒めてほしい。

団子にはお茶だろうか、と考えつつ戸棚を漁っていると、会社の同僚が台湾旅行にいったときの土産が目に入る。そういえばずっと戸棚に寝かせておいたままだったなぁ、と思いながら引っ張り出した。

やっぱり季節外れに見える、耐熱ガラスのコップを居間のテーブルに置く。テーブルの前でちょこんと座る少女は、こちらが一緒に食事の席に着くのを待っているようだ。

便利なティファールさんから湯気が上がったところで、コップの中に直径一センチメートルほどの丸い球

を入れる。少女の目が、きょとん、と、同じくらい丸くなる。

静かにお湯を注ぎ、魔法をかけるみたいに、湯気をそうっと息で吹き飛ばす。再び立ち上がってくる白いもやの向こうで、幼い瞳が爛々と輝き始めた。

コップは透明である分、中で起こっていることがよく見える。ただの球体だったそれが、ゆるりとほどけ、のびのびと羽根を伸ばしていく。それは横に、天に向かってふわりふわりと広がっていき、コップの中で愛らしい黄色の花を咲かせた。

「わぁ……！」

雲に隠れているだろう月よりももっと光を放っている瞳が、感嘆の色を乗せてコップの中を凝視している。すごい、すごい！と興奮しながら言う様子に、こちらの口元が微かに緩んだ。

まぁるい団子は、きっと両親と共に作ったのだろう。大きさもまちまちで、たまにあんこがはみ出ているものもある。けれど、これがあの家族にとってのコミュニケーションの一環であり、楽しみでもあるのだろう。

肘をついて眺めていたこちらに、はい！と一番大きな団子が差し出される。苦笑して、一口で団子にかぶりつく。思ったよりも大きく、何度か噛み砕くまで酸欠に陥りそうだったが、数回に分けて飲み込んでいく。もちもちとした弾力の中にある、荒く潰された小豆の感触。舌の先で零れ出てきた餡の味を掬い上げながら、じわりと滲む唾液と共に噛みしめた。

「おちゃのおれい！」

ばぁっと笑う少女に、ありがと、と口の中に団子を残しながら行儀悪く礼を言う。それがお気に召したのか、満足気に一つ頷くと、少女は自分も団子に手を伸ばした。小さな口で、歯で、かぶりと団子に致命傷を与えにいく。

「来年は泥棒しにいくといいよ」

「どろぼう？」

「お月見泥棒。パパとママに教えてもらいな」

アパートの外には、未だ雨音が満ちていて、月は明日になったところで見えるかどうかも分からない。けれどもこの日、自分たちは二人きりでお月見をしたのだ。数々のまん丸い月を渡り歩くように、そう多くない団子を半分に分けながら。

【終】

# 炭酸

蛾の舞う街灯に照らされて、ゴミ袋をゴミステーションに放り投げる。コンクリートブロックにぶつかって、ゴミ袋がまた僕の足元まで転がってくる。僕はそれをゴミステーションに蹴り戻す。

「ゴミ出しは朝になってからがルールですよ」

後ろから声がした。僕は思わずチッと舌打ちする。それから、声の方へゆっくりと振り返った。スーツ姿の男だ。僕より少しだけ背が高く、がっしりした体つきで、顔の彫りが深い。少し日本人離れした雰囲気が学生時代の平中先輩に似ている。

「あれ、あれあれ、もしかして、竹沢か。久しぶりだなあ」

僕は左手でメガネを上げる。目を細めて男の顔を眺める。

「平中先輩に似ているんじゃなくて、もしかして、平中先輩本人ですか」

「何だよそれ。それにしても久しぶりだなあ。竹沢、今は何してるんだ。ちょっと俺んところに寄ってけよ。近くなんだ」
「でも、今から、ですか」
「そうそうそう。酒の一本か二本を開けるだけならそんなに遅くならないだろ。おもしろい酒があるんだ。あ、もしかして明日早いのか」
「いえ、そういうわけじゃあないですが」
「ならいいだろ。歩いて五分もかからないから」
平中先輩が僕の肩をつかんだ。痛い。
「ほら竹沢、行くぞ」
先輩は僕の肩を抱いて歩き始める。少し、僕の足がもつれた。
僕が「まだですか」と訊いて平中先輩が「もうすぐ」と答えるやり取りを四回ほど繰り返して、古いコンクリートのアパートについた。切れた蛍光灯の階段を上がって、点滅している蛍光灯の共同通路を歩いて、通路の曲がり角のところで先輩は立ち止る。

「ここだよ。遠慮なく入れ」
先輩は鍵を回し、ノブを回し、ドアを開ける。中に入って明かりをつけながら僕の方を振り返った。
「遠慮すんな」
中に入って、僕は部屋の明るさに目を細める。ドアを閉め、靴を脱ぐ。目を細めたまま、ぐるりと周りを見渡す。一口コンロと流し台と冷蔵庫で窮屈なキッチンの奥にリビングがある。リビングは、テーブルとベッドと積まれた段ボール箱があるだけで、清潔感があるというより生活感の薄い部屋だった。
「どこでもいいから座れよ」
平中先輩がリビングのテーブルを指さした。僕はキッチンを通り抜けてテーブル脇に立つ。部屋の角に、ガムテープとカッターナイフと、いくつかのゴミ袋があった。段ボール箱とゴミ袋を眺めていると、先輩が白いボウルを持ってきた。それから、それをテーブルに置く。ボウルには、ミニトマトが山になって入っていた。

「ちょっと作るから待ってろ。竹沢って何か食べられないものってあったか」
先輩はそういって小さく笑った。僕は「いえ、特にないです」と答える。先輩は「そうか」と言って、キッチンに戻って冷蔵庫の中を覗きこむ。いくつかの野菜を取り出す。それらを軽く水で洗ってボウルに入れて、僕の方に顔を向ける。
「竹沢。今は何してるんだ」
「来月から派遣で働くことになりました。梱包材の会社です。段ボールとか、発泡スチロールとか、えっと、プチプチみたいなヤツとか」
先輩は、「ああ、プチプチね」とうなずいた。それから洗った野菜を切っていく。僕はミニトマトをひとつ口に入れて、座った。みずみずしいというより、水っぽく感じる。よく冷えていて、でも、甘みも酸味も香りもあまりしない。
「でも本当は、プチプチって名前は他の会社が使っているのでダメなんですけどね」
「働き始めるのは来月からだったよな。そんな説明、どこでされたんだよ」
「面接のときに会社説明とかもされました。少しだけ、ですけど」

僕はまたミニトマトを口に入れた。やはり、水っぽい。その水っぽいミニトマトを、もうひとつ口にふくむ。口に入れたミニトマトを奥歯で潰しながら、僕は平中先輩を眺める。先輩の大きな手は、野菜を切り終えると、換気扇をつけてコンロにフライパンを乗せた。それから、冷蔵庫から出したパックの肉を炒め始める。紙封筒を破り開けるときのような、スピーカーに混ざるノイズのような、ジジジッジジジッと肉の焼ける音が僕のところまで届く。平中先輩は、僕とは違って、慣れている感じがする。

またミニトマトを口に入れて、僕は顔を上に向けた。天井や明かりのカバーは古く汚れているが、中の明かりはそうではない。真新しくて明るい光が、正方形に整列している。等間隔に、的確に、適切に。それはやっぱり、少し眩しい。何で僕はこんなところにいるんだろうか。

「なあ、絵の方は、マンガの方はどうなってるんだ」

平中先輩の声に、僕は顔を向けた。先輩はフライパンを揺すっている。その動きは古いオモチャのようにも見える。

「竹沢。お前、マンガの方はどうなんだよ」
平中先輩が繰り返した。僕は両手で自分の頬を上げる。静かに呼吸をして、頬がそのままの位置になるように表情を馴染ませる。それから、そっと両手を離す。
「諦めました」
いつもより、明るい声が出た。
「そうか。俺、お前の絵とか好きだったんだけどな」
「結局、才能がなかったんですよ。まともにストーリーを作れない。緻密な設定も作れない。効果的なコマ割りもできない。だからってイラストレーターのように一枚の絵で完結させることもできない。何より、未熟だってわかっていながら、真剣に学ぼうともせず、好きだからって中途半端にだらだらと続けて、そんなので結果が出るわけなかったんですよ。当然の結果です」
キッチンから、ノイズのような焼ける音に混ざって、カッカッと金属音がする。フライ返しかお玉がフライパンに当たる音だろうか。パチンと音がして、換気扇の音がなくなる。

それから、平中先輩はいくつかの皿を持ってきた。それらをテーブルの上に並べる。テーブルの真ん中に肉と野菜を炒めた大皿と、その大皿を挟むように炒飯が二皿。冷蔵庫の前まで戻って、先輩は紙の箱を冷蔵庫の冷凍室から出す。破って中身を皿に乗せて、電子レンジに入れる。

「炒飯と回鍋肉だ。回鍋肉にはニンニクの芽をたくさん入れたけど、働くのが来月からなら問題ないだろ。餃子も、もうすぐ温まる」

「ありがとうございます。豪勢ですね」

僕の言葉に先輩は「ははははっ」と笑う。それから、冷蔵庫を開けて、酒瓶を出して、グラスを持ってテーブルの前まで戻ってきた。

「こいつだ。これが面白い酒だ」

深く暗い緑色の酒瓶に、青っぽいラベルが貼ってある。平中先輩はその酒瓶とグラスをテーブルに置く。ナイフを出して、瓶の口を包んであるビニールに切り目を入れた。その切れ目からビニールを両手でやぶる。ビニールの下には、針金で縛り止められたコルクが

あった。先輩はそのコルクを押さえつけるように左手で握る。握ったまま、右手でゆっくりと針金をほどく。はずした針金をテーブルに転がす。瓶の口のすぐ下を右手で握るように、瓶の口とコルクと右手を左手で包むように、瓶の口を両手を握り直す。それから、先輩の手の中でポンッと鳴った。

先輩がグラスにお酒を注ぐと、グラスの中が泡立った。その泡はすぐに消えて、グラスの中は透明な黄色で、小さな泡が生まれては浮かんでいく。僕のところまで、甘く香る。先輩がそのグラスを僕の前に差し出す。甘い香りが強くなった。

「とりあえず、何も聞かずに飲んでみろ」

平中先輩はニヤニヤとしている。僕はグラスを覗きこむ。少し揺らすと小さな泡が弾けて甘い香りが濃厚になる。この香りとこの色合い、ああ、ハチミツだ。ハチミツの香りだ。だけれど、むしろハチミツそのものより強く香ってくる。僕は甘い香りのグラスのお酒を、ゆっくりと、少しだけ、口にふくんだ。甘く、ない。むしろ苦い。まったく甘くないわけじゃあないけど、ほんとうに甘みはわずかで、強めの炭酸の感触する。飲み干すと、苦み

はすぐに消えた。もう一度グラスを覗きこむ。甘いハチミツの香りがする。もう少し飲む。やっぱり甘くない。香りは甘いのに、飲むと苦みと炭酸でさっぱりしている。平中先輩の方を見ると、先輩は「な、面白い酒だろ」と笑った。

それから、先輩はそのお酒の説明をしてくれた。アルファルファという植物のハチミツを使ったミードという種類のお酒らしい。やはり、ハチミツ。僕がグラスの中を見つめると、電子レンジが鳴った。平中先輩は電子レンジから餃子を持って来る。それからすぐにミードというお酒の種類についての説明を続けた。ミードというのは、ハチミツを醸造したお酒のことだそうだ。それを聞きながら、僕は炒飯と回鍋肉と餃子を食べつつグラスのお酒を飲んだ。ハチミツを醸造したお酒だというのに、さわやかに苦い。味の強い中華にも、その苦みはよく合った。

三杯目をグラスに注いでもらって、ふたくち飲んで、僕はグラスを置いた。グラスに残っているお酒からハチミツの香りが漂ってくる。

「おい、竹沢。どうかしたのか」

「何で、こんな美味しい酒なんですか。こんなときには、不味い酒でいいじゃないですか。何でいい酒なんですか。美味しいと、惨めな自分に浸れないじゃないですか。不味い酒で自分を罵ることもできないじゃないですか」

しょっぱい。口まで流れて来た涙は塩味がする。右手で目元を拭う。

「俺もな、そう思ってたんだ」

先輩の言葉に僕は顔を上げる。先輩は笑っていた。

「俺の勤めていた会社の親会社がな、粉飾決算してたんだ。それで先月末、俺のところの会社が潰れたんだ。だから俺、無職になったんだ。今はもう無職なんだ」

先輩は餃子をひとつ口の中に入れた。それから、暗い緑色の酒瓶をつかんで自分のグラスに注ぐ。

「ありがとう」

注いだばかりのグラスを、平中先輩は飲み干した。

Hive

*個人サークルfulidomからミードをテーマにした合同企画です！*
*さまざまなミードの、あざやかな世界を、もっと深く覗いてみませんか？*
*詳しくはTwitterアカウント@fulidomまで。*

参加者一覧（掲載順）

笹谷香菜(@sstnkn)

忙しくなると省エネモードというか、ごはんがあんまり食べられなくなります。そういうときは、だいたいホットミルクとゼリー飲料とポカリスエットを飲んでくらしています。そして暮らしが落ち着くと、今度はお肉やお豆腐、お米、ねぎなどが食べたくなります。今はおもちを愛しています。

中森つん(@N2_tsun)

死にそうなスケジュールでも死なないことがわかりました。関係各位、健康管理には気を付けましょう。

日魚ときお(@tokyosanfish)

作んなくてもいいよ！食べてるのでもいいんだよ！と言われひょっこり参加してみました。お料理はだいたい切り方が豪快、見た目は二の次。お腹に入れば同じだって主張したい(震え声)普段は落描きをちぎっては投げちぎっては投げしてます。

巫夏希(@natsuki_miko)

今回はロールケーキの話。そうして妖怪とか交えてみたり。シリーズのお話しですが、これでも単独で読めるようになっております。ロールケーキが食べたい。

豆崎豆太(@qwerty_misp)

参加者さんが増えてほくほくしています。引き続き参加者さん募集中です。普段の発言があんなの（タイムライン参照）だから参加者が増えないのか、手のひらを眺めてお待ちしています。

小早川(@dodoitsu_)

普段は都々逸を詠んでいます。興味のある方は「都々逸ヱレキ冊子」で検索検索ゥ！

篠田くらげ(@samayoikurage)

またBLを書いてしまった。まさか、毎回……！？今回も書いていて楽しかったです。お好み焼き、食べにいらしてくださいね。ありがとうございました。さよなら京都。

ボンゴレーノ麹(@peperoncino_k)

秋といえばお月見。お月見泥棒というのはうちの地方の風習で、小さな子たちが「お月見泥棒にきました」とご近所さんを練り歩いてお団子をもらうものです。ハロウィン日本版か？

古井久茂(@fulidom)

個人サークル fulidom 代表の古井久茂です。
我々はいつまで個人サークルでなければならないのか毎夜毎夜枕を濡らしております。新規メンバー募集中です。
小説や短歌の依頼も受け付けています。あなたの依頼をお待ちしております。
ページを開けばそこにいる、古井久茂でした。